

中国美术学院美术考级教材
素描分册
第1册
中国美术学院美术考级教材
素描分册
第1册

京鹿子



1月号

待春

丸山佳子

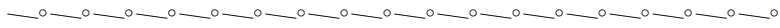


神迎へたれも教へぬ鳩の所作

文化の日尾のあるものは穴を掘る

どうしてもこればかりにと真白菊

蛇穴に人智及ばぬことをして



猿きげん百歳小町の尾花原

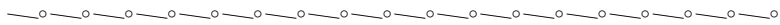
みんなそつぽ向いていいよとラツパ水仙

浮き世とはこんな日もある冬眠季

見て聞いて話して春を待つことに

不器用に折れまがりても実千両

生く者は眠れねむれと寒満月

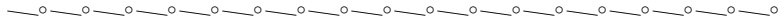


豊 田 都 峰

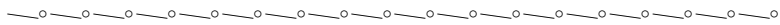
清響集 その五十七

悼むなりわれもひとしく露として
秋冷の数珠繰り繰ればつながれる
四五本の石露をより処の昨日今日
柳散る橋の灯遠くともるころ
柿干せば山より日和下りてくる
山越ゆる雲のしりへにある暮秋





誘ふかに灯ともるころを柳散る
すぐ消ゆるものに小春の思ひ
茶の花や許されてゐる午後の刻
いちまいの紅葉散り抜く吉野門
散紅葉散黄葉裡の名妓墓
紅葉散るそこにしづもる音ひとつ
黄落やともに果てたる風の嵩
全景の富士を仰げるひと黄葉



秀華採集

侘住ひいつも遠くを渡り鳥

福村 寿子

潜む孤独感、しかし救いはある、それも遠く、一時的である。そのような人間の持つ普遍的な心理を、具象的に表現している。

穂の葦の伸びきり揺れることで足る

松本 鷹根

夏衿や有事なりせば糊効かせ

渡辺 貞子

前句は、穂物の実相を把えている。鷹根作品は毎月のように湖辺の景物に挑戦しているが、深まりを見せている。後句の「有事」の措辞が抜群の効果を出しており、「糊効かせ」がたいへん洒落ている。

鈴鹿 仁

冬立つ

冬立てばふゆの貌する山巖し
遠来に水ごころ得しゆりかもめ
一茶忌や雀の意地の俳ごころ
冬蝶に一念あるも愛は哀
熱爛や百葉といふ全きもの
寒鱒や指でもの言ふ糶の人
去ぬる年母は記憶の中に生く

近 詠

宇都宮滴水

恵方道

いつぽんの木より始まる恵方道
波止の灯のひとつで足りる冬の雨
寒怒濤白い記憶のちりぢりに
冬の浪息つぐときは泡となる
凍み星の名も無き光り夜の掬
小春鳥きのふ引きつぐけふの波
兵の影をつつきに初がらす

神麓集



秋澄むや光琳 林
 鑄造の超絶技巧 日
 秋光や陶磁器漆芸工も 圓
 抱一や琳派の流れ芸術祭
 秋高し高村光雲老猿と

津軽・下北 北村 香朗

蝦夷の山指呼に龍飛の秋たしか
 義経が落ちしか龍飛秋偲ぶ
 嶺飛崎の風にすつくと鬼薊
 本州最北大間崎なる秋渚
 楸邨の淋代を過ぐ秋名残

風来坊 丸山 冬鳳
 晩夏その畑の燻火煙吹く
 休み田野球王さん打法の祖田案山子
 稗めだつ俄かに門田風夕べ
 赤ポスト孫の脊とどく稲の道
 芒穂と握手してゐる風来坊

姫ざくろ 藤岡 紫水
 ころころと二つ実をつけ姫ざくろ
 山の端に夢を拾ひぬ実むらさき
 宝剣の反りの深沈菊の冷え
 色鳥を招く木の精水の精
 虫時雨移るともなく更けにけり

山田 耕子

銀閣の流水ことに秋深む
 刻々と流れし秋水に夕月夜
 子の手引く銀閣坂夕しぐれ
 聲ひそと交して月夜の親子づれ
 静かさに星も流れて夜も深む

吉田 多美
 つぼみのみ人形に着せて菊師老ゆ
 金賞の鉢巻しめて菊ひらく
 月光をすくへば洩れし指のひま
 松手入庭師の大声天へ抜け
 夕焼を溜めて太りし柿の數

神麓集



角 直指

曼珠沙華胸に秘めたる郷土愛
古きよき時代をいまに曼珠沙華
祖の偉業讃へてやまず曼珠沙華
なほ天へ天へと棚田曼珠沙華
曼珠沙華むかし無税の村と言ふ

彌寝 瓶史

稲妻のトンネルいくつ抜け出雲
旅夜長数ふる羊群なして
金星の英気もらひて稲架掛くる
客の来て蕎麦碾く水車の堰外す
一位の実叢祠は江戸期正一位

丹生をだまき

いつまでも居据る残暑この身萎ゆ
水を買ふことにも慣れし長残暑
長残暑心ならずも無為の日々
手放せぬ日本手拭秋暑し
微熱のやうな空気がよどみ秋はまだ

美濃路

山田をがたま

木曾川に動くものなし秋に入る
穠田の植田とまがふ濃尾富む
「飛水峡」甌穴に溜む秋の水
水澄みて「飛驒の七里」は奇岩の列
蛇行の川に添ふ温泉の町の秋灯

船越 美喜

木犀が匂へば山に幸が来る
朝ごとの芙蓉の数を樂しみに
野菊晴れ手をつなぎゆく園児の列
思ふこと裏目に出でし秋の風
おもかげや折目正しき白桔梗

松田 都青

思ひ出に横顔はなし天の川
西日落つ愛の形をほしいまま
一生はこんなものかと赤のまま
星流る燃やさぬ文に魂の声
逝く夏や通夜は雨にて葬は晴

海道賞受賞作品抄

京都市

井上 菜摘子

既作

もういくつ螢を足せば母が来る
進退のどちらにも合歡咲いてをり
生き返る方をえらんで昼寢覚

新作

はんざきを戸籍に入れし女系かな
ゆびさして指紋のきえる雁来紅
耳底の産声ふたつ菩提の実
兄の掌のさらに遠のく芒原

白粥を煮て月明に遅れ来し
踏台を降りて寒九のこの世かな
水鳥へふところ深くしてをりぬ
いま生れし蝶に剥落はじまれり
さへづりの深きへ水を引きにけり
あてずつぼうにカードめくれば桜貝
どうでもいい話にもどし豆の花

京鹿子大賞受賞作品抄

東京都

坂本敏子

更衣人と逢ふ日のかるさかな

川は河へ人はいつしか霧となり

とある日の屑籠のなか繁茂せり

らくがきのやうに水鳥沼晩夏

ゑのころ草の水平思考旅はじめ

秋澄むや草一本の姉であり

接続詞の前後が消えて蟬の殻

ふところは風の出どころ吾亦紅

白玉を食べて遠流のやうな午後

目が合つて芒ヶ原は放電中

さるすべりぴろろぴろろと胃のもたれ

蛇は穴に妹のただよふ一葉舟

京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

鎌田政利

青蔦や聖書抱きもつ指栞

あした掘る甘藷軍手は束で買ふ

朝市の根付紫蘇葉は一番荷

さくら蓼越えて土橋はふた身巾

手花火やひとつ違ひでバケツ持ち

色鳥のふきこぼれゐる満願寺

種ふくべ尻にあてがふ棧俵

先遣のからすを発たせ神の留守

新涼の輪ゴムを踏みし土ふまず

竹筒の筆のざんばら翁の忌

母の忌の裏が父の忌菊脛

弔ふに菊は小振りの小督塚

京鹿子新賞受賞作品抄

大津市

森

洋子

夕焼に佇ちぬ思ひ出染まるまで

法要の過客となりて小鳥来る

送火や賤ヶ岳背に余呉百戸

修業僧わらじ百足干して秋

永別や夜々濃く銀河かかるのみ

重ね着をして峯寺に忌を修す

幽明を繁ぐ虫の音夜もすがら

義士祭の先頭籠の雪ふらす

葬り来し少し傾く時雨傘

掛蓬萊ゆたかな重みひろげたる

冬山に深く刑部の陣趾なほ

遍照と小町が並び歌かるた

京鹿子新賞受賞作品抄 大阪府 西野初音

鬼灯を鳴らしてこの頃遠目ぐせ

むかご落つ日暮れは誰も振り向かず

村中の水いそいと夏蓬

吾亦紅ふつと答の出ることも

新刊の帯の錆色秋に入る

鶉高音何をするにも腕まくり

小鳥来るそろそろ遣る気起さねば

障子貼り小犬に言つて聞かすこと

カンナ燃ゆ胸の種火は小さくとも

一筆箋書いて冬眠するつもり

悼む日の黄菊白菊翳持たず

問診のひらがなばかり時雨来る

募集大作賞

高槻市

安田優子

青水母

月の笙ひと息ごとにちはやぶる

ひとふしの竹踏み二月渴きぬる

神様の都合で受胎枝がへる

春愁を包めば淡き古むらさき

とんぼうの高さに息を合はす子ら

うめふむ真つ正面に架かる橋

花野雲ふんはりとしておかあさん

胎内の記憶あかりや恋ほたる

紙漉き女一光体として灯る

青水母よるべなき身はとどまらず

雪をんな内股で恋盗りに来る

凌霄花風にまかせて夜叉めけり

返り花銀ひとひらの忘れもの

八月や光陰のかべ朱のはしる

やはらかきガラスの吐息冬の蝶



京鹿子集

豊田都峰選

花野行き優しい時間に包まるる

叶ふなら翼を花野の車椅子

霧濡れの髪は手櫛に人と逢ふ

友情にふと鱗はしる居待月

佗住ひいつも遠くを渡り鳥

帆を高くして新涼を占めて航く

穂の葦の伸びきり揺れることで足る

枯れ初めてゐて蓮の田の生臭し

畦道は跳ねの蝗の生きる幅

秋蝶の翅のたたみにある袴り

牛蛙七百年の仕切り癖

京都 福村 壽子

城陽 松本 鷹根

京都 渡辺 貞子

夏襟や有事なりせば糊効かせ

苔の花褥いちどき華やげる

屯して非行と謂はる螢闇

時の日の時奪はるる幼らに

波の音畳めば虫の闇となり

秋すでに来てゐる波のうらおもて

十六夜や筑波二峰の相倚れる

心平の蛙合唱望の月

幾人の訃音の過ぎし花野かな

凌霄花生き生き落ちる不孝かな

舟がゆく芒原の上デジャビユ

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸